る草の花』『二軒家や二軒餅つく秋の雨』等がある」「これから真夏を迎へやうとする梅雨晴れのカラリとした空の下で、隣合せの家で気を揃へて大掃除をやってゐる。大きな自然と小さな人事との、其処に、何とも云へない親しい繋りを見せてゐる」。勝峯『評釈』に、「暗号であらうが、二軒の字で連想されるのは、蕪村の『五月雨や大河を前に家二軒』の句である」「一茶の『二軒』はたま〳〵の快晴に、かび臭い住民の住居の大掃除をする。この二軒には調和的な明るさがある」。川島『新解』に、「なが雨でかびた畳や調度、あるいは雨もり出水でもあればなおのこと、つゆばれを待ちかねて、となり同士気をそろえて、大掃除をはじめている。『二軒並んで』に親近感があって、大きな自然と小さな人事とのなつかしいつながりを思わせる。この二軒を、棟を割って住む異母弟仙六の家と一茶の家とか否かという詮議は、なくもがなである。蕪村の『五月雨や大河を前に家二軒』が思わされるが、一茶もこれに示唆されたのかどうか、以前から二軒という言葉を使いたがっていた。『青柳や二軒もやひの茶呑橋　文化二年』『蛙とぶや二軒もやひの痩畑　同』『五月雨や二軒して見る草の花　同四年』など、いずれも江戸流寓時代の作である」。

解　小座頭がひょいと頭に扇をかぶって、剽げてみせる。形りは小さいが、その剽げぶりは一人前の座頭並みだ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「こどもの癖に才はぢけて、大人より勘がきゝ、人の顔色をよむことも早い。怜悧の性質のものが、仕込まれて座頭となつたのである。小生意気にもへゝら笑つて、酔つた客の嬲りものになり済ましてゐる。暑さを払ひ涼風を求める扇は、かれらには何かといひ紛らかしたり、ばつを合はせたり、唄の音頭を取つたり、なか〳〵用途の多い必携品である。その扇をちよこんと天窓（あたま）の上に据ゑるのは、いざ踊る用意とも見えるし、ほんの座興の所作のやうでもある。『かぶる』で大人持の扇で、天窓をはづれて、顔のかくれる大きさを現はしてゐる」。伊藤『一茶集』に、「こましやくれた小座頭のしぐさ。座頭は酒席で三味線を弾いたり唄をうたつたりする旨の幇間」。川島『新解』に、「幇間は今の万歳のように、自分の頭をチョイと扇でたたく仕草をするが、『かぶる』という語に、目あきの真似をしながらも、どこか見当がちがって開いた扇をバサリと頭にのせているようなかっこうが目に浮かぶ。求めて人のなぶり者になろうとしている少年座頭の間のぬけた哀れさ」。

竹の子と品よく遊べ雀の子　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・2、同閏4。

解　雀の子よ、竹の子にならって行儀よく遊べよ、の意。竹に雀のとりあわせ。

▼　勝峯『評釈』に、「客間の襖に、廊下なら引戸に、邸宅のさうした建具から、金銀糸の眩しい裲襠に、豪華な西陣の丸帯に、女性の衣装の模様には竹に雀が、日本的な意匠として、図案化されてゐる。それなのに雀の子はあまりにも饒舌で、口うるさく絶えず囀つて、竹の子をからかひ、いぢめるやうにさう〳〵しい。一茶の俳諧歌に『あながちに雀のみかは鶯をずんと品よくとめる竹かな』とあるので、『品よく遊べ』は雀の子を矯めて、竹に雀の配合美を求めたのである」。川島『新解』に、「『竹に雀は仙台さまの御紋よ』と、古い童謡にも唄われているごとく、伊達家の紋どころでもあり、梅に鶯と共に、竹に雀の配合美はマンネリズム化していると言ってよい。そうした美的伝統を自覚して、雀の子よ竹の子を相手に行儀よく遊べ、の意」。

入梅晴（つゆ）や二軒並んで煤払ひ　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・閏4。

注　「二軒並んで」、蕪村に「さみだれや大河を前に家二軒」（蕪村集）。「煤払ひ」、大掃除。

解　つゆの晴間、待ちかねたように二軒並んで大掃除をしている、の意。

▼　川島『新釈』に、「二軒家といふことを頼りに云って見たかったらしく、『春立つや二軒つなぎの片住居』『五月雨や二軒して見

注　前書「病後」、『七番日記』文化十三年七月の部に、「六、折々雨。大熱。度々雨ニヌレタル故ナラン」。同八日、「瘧（おこり）大発」とあり、『八番日記』文政二年七月の部には、「三、中ノ刻ヨリ雷雨。瘧」「五、晴。申中刻瘧」「九、晴。今日瘧早〔ケ〕レバ中飯酒呑。瘧待ナガラ眠リケレバ持仏灯トモレバトク経ヲ誦セントスル」などとある。「ちりの身」、病後痩せおとろえて軽くなった身をたとえたもの。

解　病後、痩せたからだは「ふハ〳〵」と、吹く風にさえゆれるような気がする。そのからだが紙帳にふれると、紙帳もまた「ふハ〳〵」とゆれる、の意。風が当たったり、ものがふれたりして「ふハ〳〵」とゆれ動く紙帳、それに病後の不安定な自身の足腰を重ねた。

▼　勝峯『評釈』に、「風が吹く。紙帳は揉まれてふは〳〵揺れる。塵は風に乗ってふは〳〵飛びちる。このふは〳〵は人生の漂泊性に適用されるし、況んや、その人生のちり芥のごとく軽蔑される我が身は紙帳の風に動き揺れる不安定そのものである。この身と紙帳は、ふは〳〵の軽く定めない点で同視される。瘧は一時的に快癒したものゝ、その為、痩せて衰へたので、塵の身と卑下し、紙帳には発作の起った時から世話になったことも下心にはある」。川島『新解』に、「ちりの身は、卑下またははかなさにいう常套語であるが、ここでは、より多く現実的な塵の軽さにたとえられている。紙帳は、いかに質のよい昔の紙でも、麻蚊屋（ママ）などに比べたら重量感がなく、たよりないものであろう。その紙帳が風にふわつくのと一緒に、自分のからだもふわふわしているようだというので、病後の衰弱体の力ない実感がある」。

五月雨も仕廻（しまひ）のはらり〳〵かな　（一茶）

㊐『七番日記』文化13・6。

▽『八番日記』文政2・5、「さみだれの」。

解　梅雨の季節も終り近く、しとしとと降り続いていた雨も、今は時折り「はらり〳〵」と落ちてくる、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「五月雨には豪宕な語感がある」「激しい雨量を持つ五月雨も、やゝ三十日も連続して、出梅と呼ぶ終り頃になると、疎らに底をたゝいて、小粒をばらまくやうな音を立てるに過ぎない。はらり〳〵は雨水の乏しさを感じさせるが、ばらり〳〵と濁音でよんで、別れの意を響かせた方が、句意に叶って来る」。川島『新解』に、「梅雨の季節はもはや通り過ぎたのに、なお、未練らしくはらりはらりとやって来る残り雨である。従って、この「はらり〳〵」には屈託のない明るさがある」。

小座頭の天窓（あたま）ニかぶる扇かな　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・閏4。「天窓にかむる」。

▽『八番日記』文政2・2、「天窓へかぶる」。

注　「座頭」、三味線を弾き、唄をうたう剃髪の盲芸人。

おきのどくなことよ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「花御堂の小さな裸像は御手を上下して、唯我独尊の予言者的な自覚を象徴されてゐる。天竺の灌仏法によって、参詣者は甘茶を柄杓でつぎから、つぎへ浴せるので、誕生されてこのかた、今は日本の寺々で、けふ一日、刹那の乾きを見ないまで、敬虔に濡れ雫れてましますのである。誕生仏のみどり子の頑是なかるべくして、忍従の一日を行ぜられる辱けなさよ。――『かはく間もなし』が一茶的に『さぞ退屈な』の人間味、その深いおもひやりが託されてゐる。それを単なる説明的に解しては一茶は泣くであらう」。川島『新解』に、「白紅黄さまざまの花にいろどられた花御堂の中に据えられた誕生仏は、参詣人の老若によって次から次と甘茶をそそぎかけられる。子供等が小さな青竹の手桶をさげて、その甘茶をもらいにいくのもほおえましい情景である」「この句は素直な写生句らしいが、実は、中七『かわく間もなし』は、『わが袖は潮干に見える沖の石の人こそしらねかわく間もなし』(千載集)を引くまでもなく、涙を連想させるので、明るく祝福さるべき誕生仏に対する反射的な言葉の興味が、ねらいであったと思う」。

五月雨も中休ミかよ今日ハ　(一茶)

㊐『八番日記』文政2・5。

▽『八番日記』文政2・2、中七「中休みぞよ」。

解　降り続く五月雨。「おや、今日は中休みかよ」、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「けふは厭な雨垂れもなければ、湿ってかび臭い空気もたゞよはない。あんまり降り通したので、雨の方でも草臥が迫って降るのを見合せ、天上からの中途で休憩してゐるのであらう。雨の世界にも安息日があると見える感想が『かよ』で、主観的な疑問符をいひ現はしてゐる。『今日は』はこの頃の戯作ものに『こんにち』の振仮名があるから、こゝも強いて『けふのひは』の重言によまずとも、『こんにちは』の音読でよい訳である」。川島『新解』に、「毎日毎日じめじめと、あきれるばかりに降りつづいているさみだれも、合間々々には雨を忘れた日がある。「オヤ今日はお休みか」と、かえって手持無沙汰のような、雨に習慣づけられている季節感がある。『今日は』と、座五の浮上った調子がとぼけていて、長雨と取組んで持久戦を張っている人間の致し方なき図々しさが、ユーモア化されている。調子一つで生きている句である」。

病　後

ちりの身とともにふハ〳〵紙帳哉　(一茶)

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・2、2・5、上五「塵の身も」。『発句鈔追加』、「ちりの身と」。

いものゝ健かに高いいびきを聞きつゝ起きてゐる。霜のやうに大地の白い夏の月夜、老人の藁仕事は保健上もよい慰みである。『なぐさみに鰐口ならす涼み哉』の敬神的な老人達だが、藁打のそれは農本的な意義がある。手許の明るい月夜なので、仕事は面白いほど捗るし、乾いた藁の香も涼しい」。川島『新解』に、「自給自足の農家の必需品たる藁工品、縄・草履・蓑などを作るために、まず藁を木槌でたたいてやわらげておくのである。なぐさみがてらの気まかせ仕事とは言え、夏の月夜の涼みの一と時も、なお仕事を忘れぬ農民生活の実相が捕えられている」。加藤『秀句』に、「夏の月が出て都会ならちょっと門辺で涼んでみるという夜だ。しかし、農家では手ぶらで月見をする気になれないのである。暇があれば筵や縄、履物にする藁を打つ。月の下で藁を槌で打つことがわずかになぐさみなのである。寸暇も手から仕事を離さない農民心理がつかみだされた、どこかかなしみのある作と思う」。

考　「わらを打」は、藁工品を作るために、土間に埋めた伏鉢状の丸石の上で、丸太を一尺ほどに切り、さらに握りの部分を細く作った槌で、藁をたたいてやわらげる屋内の農作業である。それを「なぐさみ」にするというのである。農民の生活実態であっても、それは「なぐさみ」になすべきものではないし、また夏季の作業でもない。縄をなったり、草履を作ったりするのは冬季の仕事であり、藁を打つのはその直前でないと、打った藁はもとにかえってしまう。暑苦しい夏の夜、明り取りの窓からさし込んでくる月の明りをたよりに、汗を飛ばしながら、季節はずれの農作業にあたる。肉体的苦痛は言うまでもない。それを十分に承知した上での、上五「なぐさみニ」である。

行きづまりつつあった近世封建の制度は、その末端において相互監視の風を育てていた。農民にあっても、その埒外ではなかったのである。屋内での農作業、その間だけは、何人にも干渉・拘束されることはなく、それはむしろ解放の時だったのである。これは、早起きした老人の朝飯前の時間つぶしではない。仕事を忘れることのできない篤農の姿でもない。一茶が訴えたかったのは、むし暑い夏の夜の季節はずれの農作業、それが「なぐさみ」になるという現実の告発であったのだ。

四月八日

長の日をかはく間もなし誕生仏　（一茶）

⑭『八番日記』文政2・4。前書「八日」。上五・中七「長の日にかはく間〔も〕なし」。

注　「四月八日」、釈迦降誕祭。はなまつり。「四月八日」を「卯月八日」と翻刻するものがあるが、『寛政三年紀行』にこの形の「四」多し。

解　はなまつり（釈迦降誕祭）、参詣の人々によって、全身に甘茶を注がれる花御堂の誕生仏は、長の一日かわく間もないことだ。

である」。川島『新解』に、「花見時ともなれば、花の名所々々には急造の茶店群が出現するのを、『一夜にわきし』と誇張したのであるが、虫がわくとか、田水がわくとか、とかくきたならしいものの方へ連想のいく湧くという語を、桜に配したところに、ふてぶてしいまでの、俗語の転用化が試みられている。しかも、いかがわしい小屋がけ集団を眼前させるために適切な表現となっているところに、動かせぬ一茶の特色がある」。中島『一茶集』に、「桜の木の下に、にわかづくりの茶店の一群が、一斉に地下からわいたかのように出現したさま」。

翌(あす)〳〵と待たるゝうちが桜かな　白飛

㊐『随斎筆紀』『たねおろし』(文政8)。

注　白飛は、柏原の隣村・古間の人。滝沢氏。一茶社中。

解　明日は開花か、明後日は開花かと、待つ間が桜の魅力、咲いてしまえば、短時に終ってしまう。桜花の命は短い。

▼　勝峯『評釈』に、「つれ〴〵草の粋法師は『花は盛に、つきは隈なきをのみ、見るものかな』と、花の咲き揃ふのを却って疎んじたが、白飛は桜の立場から兼好に同感して、翌(あす)はきっと咲く。あすこそ開くぞの期待で、見る人を焦慮させるあいだが、桜のさくらたる所以である。さくらの未開花を讃美する、この価値観は一茶の共鳴するところとなっておらが春にも書入れたのである」。川島『新解』に、「説明の要はないであろう。『世の中は三日見ぬ間の桜かな』(蓼太)で、パッと咲いてしまえば、あとははかないもののたとえに引かれるばかりである」。

なぐさみニわらを打(うち)也夏の月　一茶

㊐『八番日記』文政2・2。同2・3。

注　「わらを打」、藁加工品を作るために、土間に埋めた石の上で木槌をもって藁をやわらげる作業。

解　汗をほとばしながらの屋内農作業だが、そこには自分だけの世界がある、の意。座五「夏の月」は、明り取りの窓からさしこむ月光。その清涼な光に、一切の干渉・監視の目から解放された「わらを打」男の安堵の気持ちを表わす。

▼　川島『新釈』に、「身の引締るやうな秋の月とも違って、天地一杯に悠々と照り渡って居る夏の月に対して、たゞ見て居るばかりでは何となく物足りなく思はれるやうな、どこやらポンとした感じを捉へて居る。然し『なぐさみに藁を打つなり』と、丁寧に断ってあるところは、やはり主観にこだはり過ぎる臭味を脱して居ない。どうかすると、自ら画中の人と見ようとする意図があるかにさへ感ぜさせられる。天保調の嫌味は既にこんなところにも胚胎して居る」。勝峯『評釈』に、「農閑期の冬は藁砧をまへに、槌のこだまを雪の山々に呼ぶ。麦刈だ、田植だ。相互労作のえい(方言)までして、農繁期の夏は今日の疲れ、明日の励みにどの家も早寝する。老人は冬より夏が元気だ。早寝の癖が抜けて、若

藤『一茶集』に、「何の風情もない藪がちの村でまぐり当りにも梅の花を見出した喜び」。川島『新解』に、「開墾の手の多く入っていない藪勝ちの村を通りかかった時、偶然梅の花を見つけたのである。『まぐれあたりも』のもは軽い嘆詞と見たい」「とにかく、藪村で思いがけなく梅の花を見つけたのがうれしかったのである」。中島『一茶集』に、「なんの面白味もない、藪ばかりの村里で、思いがけなく見出した梅の花」。

正月や夜ハよる迎うめの月　（一茶）

㊐『七番日記』文化15・6。『発句鈔追加』。

解　正月とばかり昼は昼でうかれ暮し、夜は夜で風流に名を借りて梅の花見と洒落こむ、の意。都会の伝統的な正月の観念や風雅観への抵抗・反発がある。『七番日記』文化10・2、「月よ梅よ酢のこんにやくのとけふも過ぬ」。

▼　勝峯『評釈』に、「空想の句である。うつかり一茶に瞞されるところである。この梅は炬燵で考へて、あまつさへ添景に、春の潤みを持つ月を配して咲かせて見たのである。柏原の正月ならば、梅は雪でなければならぬ。五尺の雪に囲まれながら夜迎で、雅俗の正月生活を梅の一字に対照させたところ、嘘とけなされぬ巧みさ、芸のうま味を喫して、此まゝ瞞されてゐたい気持さへする。夜迎には昼の正月の郷俗的行事にかまけ、俗人ならば月下の梅の精神的慰藉には、無関心である筈の夜へのこゝろ配りに、この句のやまがあるのである」。川島『新解』に、「正月をする、正月のようだ、と言えば、特に農家では耕作の手を止めて、食味に満ち足りた団欒の境地を指すのである。そのけっこうな日暮しをした上に、夜は夜で梅の花に月がさすというゆたかな正月気分を賛美したのであるが、これを直ちに故山における一茶の生活と結びつけて考えることは、一茶のトリックにかかることである。信濃第一の雪の名所と言われている柏原の正月は、ふかぶかと雪に埋もれて、梅の花どころではないはずである」。中島『一茶集』に、「昼は昼で遊び暮し、夜は夜で梅の花に照る月を賞美する、という心持ち」。

茶屋むらの一夜ニわきし桜かな　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・5、中七以下「一夜に出来し花の山」「出現したるさくらかな」。『自筆本句集』『浅黄空』、中七以下「一夜に涌くや花の山」。

解　桜の季節、にわか作りの茶店の一群が、一夜にして涌き起こったように建ち並んだことだ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「桜の堅い蕾が急ニふくれてぱっと咲く。季節にせつかちで、慌たゞしい開花振りである。花時をあて込む茶屋掛けに、ぬかりのない商人達だたゞ一ト晩で俄拵への茶店、茶店を聚落的に設けた。その手廻しの早さ、芝居のせり出しのやう

に囀っている麦畑などを背景に、一日の御用を勤め終えた馬が何頭か続いて帰ってゆく。馬上の人は銜えぎせるか何かでのんきに馬の背に揺られてゆくといった春の夕暮れの情景である」。

京嶋原

入口のあいそになびく柳かな　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

注「柳」は、島原（遊郭）大門口の柳。そのしないぶりに、廓者の嬌態を匂わせる。

解　さすがに島原大門口の柳、しなやかに愛想をつくっているよ、の意。柳の姿に郭者の嬌態を匂わせている。

▼　勝峯『評釈』に、「呉越の客のいづれにも靡くのを本情と見て、其角は『傾域の賢なるは此柳かな』で、彼女らの憂き勤めをなだめてゐる。それは出口の柳の句である。今は廓の入口に替つたが、柳はむかしながらの嬌態で、百年後の嫖客を迎へ、蠱惑的な春色に哀へを見せない。かう解するのは膝栗毛七編の口絵に、柳を背景の遊女に『島原の出口にして』の前書で、其角の句を賛しているからである。一茶は其角の句を知らないで、島原を象徴する柳だけを詠んだとすれば、誰彼となく廓へぞめき入る人たちに向つて、『ようこそ』の情を含めてのそのあいそ――愛想に、枝をしなやかにくねらせつゝ、靡いてみせると云ふ単純な主観的写生として、深入りをしない方がよいであらう。伊藤『一茶集』に、「島原の大門口にある『出口の柳』である。お愛想に靡く柳までも傾域の本情を象徴する様でしをらしい」。川島『新解』に、「廓に浮かれこむ人たちを迎え入れるように入口の柳がしなやかに愛想を作っている。というのは、同時にくるわ者の嬌態を匂わせている」。中島『一茶集』に、「お愛想になびく柳にまで嬌態が感じられる、との意をもたせている」。

藪村やまぐれあたりも梅の花　一茶

㊐『八番日記』文政2・3。

▽『七番日記』文化11・1、上五「山里や」。

注「まぐれあたり」、『方言雑集』、「迂当」に「マグレアタリ」とルビ。

解　藪のほか、これといった見所もない村里で、思いがけなく出会った梅の花、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「蔓延（はびこ）るのは雑草ばかり、藪だらけの或村を通つた。野も山も青い春に甦つて麗かだが、この村は季節に取残されて、荒涼たる冬の姿である。住む人ありや。炊ぎの煙りを求めて、あたりを見廻した時、強い香気の漂ふのを覚える。痩せながらもその枝に白い花を鏤（ちりば）めた梅の木である。意外だつた。これこそ犬棒のまぐれあたりである」「まぐれあたりの下に、『に』を挟んで『も』を『にも』の意に取れば理解に容易である」。伊

「夕日」に「雲雀」の声がのどかで平和な空気をかもし出し、馬を曳く父とその馬に横乗りになった子をつつんでいる。作者はそこに人間の本来あるべき姿を見てほっとしたのだった。

▼　川島『新釈』に、「春の農事に馬を使用するのは、多く田をおこすこと、田に水が入ってから代かく時にも使はれるさうである。一日の耕作に疲れて、然し快い労働のあとのゆったりした気持で、農夫達が裸馬に横乗りして三々伍々家路を指して行く。道のほとりの麦畑には、畊をとゝのへる雲雀が姦しく鳴連れ飛交うて居る。落方の陽は長閑に馬上の人の頬被りを染めて居ることであらう。『つゞくや』とあるので、場所の広さを想像させる。遠く秩父甲信の連山に囲れる武蔵野か、善光寺平でもあらうか」。暉峻『鑑賞』に、「一日の耕作を了へた農夫の家族達が、夕霞の中を三々五々と引上げて行く。そしてどの群も、恐らく疲れた女子供が乗ってゐるのであらう裸馬を牽いてゐる。信州の高原地帯とか、或は遠景ハ秩父連山を置く武蔵野とか、広い、見渡しの眺望であります。労働の後の快い疲労感と、夕霞の哀感が如何にもしっくりととけ合ってゐます。一茶は又『夕がすみ』を『夕雲雀』ともしてをりますが、甲乙はありません」。勝峯『名句評釈』に、「街道か――無論雲雀が囀り暮してゐるので田舎街道――野中の道か、馬上の人物は何物かで情趣がそれ〴〵違って来よう。『横乗』とあるから武家筋ではない。やはり農作を終へた百姓が煙管を咥へなどして、帰路を共にしての一列であらう。夕日は山の端に沈まうとして余光を日焼けた農民たちの首筋に投げてゐる。一日を鳴きつくした雲雀も最後の奏曲を天降らしてゐる。田園の日永はかくて長閑に終幕しようとする」。勝峯『評釈』に、「一日の御用と駄賃を稼いで、それ〴〵の家に帰る助郷（すけがう）馬であらう。つゞくが徴発された馬を思はせ、夕雲雀が御用を勤めての帰りなることを推量させる。横乗は横向に両足を投げ、馬の背にまたがらない無造作な乗り方である。馬は厩への道を覚えてゐるから、手綱を捌かずともよい。乗人は銜へぎせるかなんかで、暢気に揺られて行く。傾く日にけふの別れを惜しむ雲雀が、高く暮れゆとる野空に囀ってゐる。横乗の馬は雲雀野の背景であるが、『つゞく』の複数で没色彩の表現を賑はす春の晩景にもなる」。伊藤『一茶集』に、「一日の仕事を終った馬方が、無造作に馬に横乗して家路に就くさま」。川島『新解』に、「駅伝の送荷をすませた駄馬の列であろうか。馬子たちは一日の労働に疲れて、しかし、ゆったりとした解放感を味わいながら、はだか馬に横乗りして各々の家路をさしていく、道のほとりの麦畑には、ねぐらをととのえる雲雀がかしましく鳴きつれ飛び交うている」「『つゞくや』に、数頭もしくは十数頭を眼前せしめる見渡しの広さがある」。中島『一茶集』に、「夕雲雀のさえずる春の野辺、一日の仕事を終った農夫がいくたりか、それぞれ無造作に馬の背に横乗りして、家路に向かうさま」。宮本『大観』に、「宿駅常備の人馬の不足を臨時に補なうために徴発された助郷馬などであろう。夕雲雀がのどか

かすむ日やしんかんとして大座敷　(一茶)

㊐『八番日記』文政2・2。

解　霞たなびく春の日、何の動きもなく澄み切った静けさだけを擁する大座敷、この大きな静けさは、の意。暖かく、やわらかな外気に、大座敷の澄み切った静けさ、その冷え冷えとした空気を対比した。

▼　川島『新釈』に、「『霞む日や』と、上五を概念で覆うて、扨て又立戻つて来て、概念の中にしみじみと浸り込んで居るやうな作である。甘い潤ひを含んだ寂しさ。静けさ。…大寺と見るも大家の広間と見るも問題ではない。作者の捉へて居るものは、気も遠くなるばかりの春の昼の静けさである。此所まで来ると、一茶も或ところに行着いて居る。無形のものを捕へ得て居るといふ感じを深くする。生涯を自然と旅に任せて居たやうな漂泊の詩人芭蕉も、人事にかまけ世路難に惑ひながらも一意に俳道に執して居た一茶も、期せずして一つの流れに合して、此所で一寸顔を合せて居るやうな気がする」。勝峯『評釈』に、「かすみは自然の動きを日すがら覆ひ、しんと澄むやうな静けさは、ものゝ影も曳かず、四壁を這つてこの大座敷をつゝんでゐる。閾のきしみが微かにしかも、はねつかへすやうに壓へてしまふ。人気(ひとけ)の絶えた大座敷である。柏原ならば本陣中村六左衛門などの家構へである。自然を霞で、座敷を静けさで結ぶものは、『大』の字の蝶々ひがあるからである。大の字の効用はこの句で、つかひ尽されたかに見える」。川島『新解』に、「『しんかんとして』は、小手先きの技巧や思い付きではない。自然の呼吸と一つになって吐き出されたような言葉である」。加藤『秀句』に、「野も山も霞靄たる霞の中に罩められて、茫乎とした視界、身を置く大座敷だけがしんかんとして音もない。あまりに静かでひえびえしてくるような畳の青さでもある。大名の泊まる柏原本陣などの様であろう。霞のかかったひろい天地に、春を拒むかのような一画をつくりだしたこの句は、なかなか迫力がある」。宮本『大観』に、「あたり一面霞がぼうっとこめている春の真昼時、もの音一つしない、しんとした静けさである」「『しんかん』は本来、森閑と書いて、静まり返ったことをいう、ごくありふれた熟字であるが、このかな書きの『しんかんとして』はこう表現する以外、いかなることばも見当たらぬほど、ここでは『しんかんとして』が自然の呼吸に溶けこんで活かされている」。

横乗の馬のつゞくや夕雲雀　(一茶)

㊐『八番日記』文政2・3。

▽『八番日記』文政2・2、座五「夕がすみ」。

注　「横乗」、馬の背にまたがらず、いすに掛けるように乗ること。

解　送荷をすませた駄馬の列であろう。途中まで迎えに出たわが子を、馬の背に横乗にさせて、続々と家路をさして行く、の意。

考　右にあげた諸注で、不自然なところがある。その第一は「雀の子」、そのものについてである。雀の子は、木の枝にとまることができるようにならなければ巣立たない。巣立った雀の子は、木の枝を飛び渡って翼の力を養うのにそう時間はかからない。したがって、路上などに降りて餌をあさるころには、かなりの距離を飛ぶ力を持つのである。いったい、路上で馬に踏まれた雀の子、そんな例があるだろうか。

つぎに、「往来のこぼれ餌を拾ふのに忙しい」（勝峯）、「米か麦を運んでいる馬であれば、俵から種粒がこぼれがちなものだから」「雀は危険をおかしても馬のそばに寄ってくるのである」（萩原）というのもいかがなものであろうか。また、「貝殻の馬に乗って元気よく走り回っている子供が、よちよち歩きの雀の子に呼びかけたさま」（丸山）はどうか。「元気でよく走り回っている子供」の傍に「よちよち歩きの雀の子」が寄って来るだろうか。

春先、子雀が道路に降りて餌をあさっている。そこへ駄馬が通りかかる。「そこのけそこのけ」踏まれるぞ。これは童詩の世界というべきである。また子供が竹馬などで遊ぶ傍に、雀の子が降りたっている。それに対して「そこのけ、そこのけ」と呼びかけるさま、これは幼児絵本の世界である。

一茶には、「けむからんそこのけ〳〵きり〳〵す」（『七番日記』文化10年9・10月の部）、「やよや蝶そこのけ〳〵湯がはねる」（『七番日記』文化13年3月）などがあり、「そこのけ〳〵」は常套語の一つであった。それはすでに指摘されているように、狂言の『対馬祭』の文句「馬場退け〳〵、お馬が参る〳〵」、黄表紙『稚衆忠臣蔵』の「山のぬしはおれひとり、おんまが通る、さきのけつ、さきのけつ」によったものだった。また、「馬ごっこ」が各地で行なわれていたことも事実である。だが、それだけではいかにものたりない。

『寛政三年紀行』の蕨の駅における一件、これを背景に「馬迄もはたご泊や春の雨」を解釈すれば、それが泰平の御代をうたったものではなく、現実の告発、ないしは、体制や時代に対する激しい批判と見なければならない。蕨の駅における屈辱的体験が時を経て、「馬迄も」と噴出したように、「雀の子」の句もまた、現実の告発、時代や社会に対する批判と解すべきであろう。

「雀の子」と「御馬」は、力という観点をもって対比されている。その力とは権力にほかならない。すなわち「雀の子」は、「雀の子」にも比すべき弱者、被支配者の象徴、「御馬」は「馬」にも比すべき支配者の力の象徴である。街道の端に土下座して、武家の行列を見送る農民の姿は、まさに「雀の子」にも比すべく、あわれにも小さいのである。

狂言言葉によったであろう「そこのけ、そこのけ」を使って、また子供の遊戯におけるかけ声らしく見せかけて、一茶はその批判精神を発揮したのである。

馬である。『そこのけそこのけお馬が通る』というのは、子供が竹馬や玩具の馬に乗って歩く時のかけ声であったのを、借り用いたのである」。加藤『秀句』に、「童謡的な口吻がきわめて口にしやすいために、世人のもてはやすところとなったものだと思うが、この句の原型になる発想はそれ以前にもかなり多い。その一つがこの『きりぎりす』(注、寝がへりをするぞそこのけきりぎりす)である」「『そこのけ』という表現はよほど一茶の気に入ったものらしい。元来この語は大名の供先が道の人を退けるときなどに使われて、格式ばったひびきがある。柏原にいたころの少年一茶の耳に、参勤交替の加賀侯の先触が威儀を正して入ってきたときのこの言葉、江戸生活で武士の口から町人に向けて出るときのこの言葉、それを巧みに一茶化して生かしているようだ」。栗山『一茶』に、「『雀の子』の句解についてはこれまでも諸説に分かれている。畦道などに遊んでいる雀の前を通る曳馬と見る説、『御馬』とあるので大名行列の馬とする説、子供の竹馬や玩具の馬とする説などである」「全体の句調から感じとれるものは、ひどく弾んだ掛声のようなもので、普通の曳馬や、静かな行列の馬というよりは、やはり路上を闊歩する子供の玩具の馬と解するのが穏当であろう。『お馬が通る、先のけ先のけ』と囃しながら子供が玩具の馬にまたがって走り回る風習はいくらも地方にあった。大名行列の馬にせよ、畦道などの曳馬にせよ、句勢がそぐわないように思われる」。宮本『大観』に、「雀の子が道ばたのこぼれ餌を拾いながら遊んでいる。そこへお馬がやってくる、ほら、馬に踏まれないように、雀の子よそこをどいた、どいたとよびかけたもので、一茶の例の弱小者に対する同情が見られ、この童謡風の口調で広く一般に親しまれている」「『そこのけそこのけ』は一茶の好んだ慣用語で、これより先にも、『けむからんそこのけそこのけきりぎりす』『やよ蝶そこのけそこのけ湯がはねる』など馬以外にいくらも用いているし、また『七番日記』の『それ馬が馬がとや親雀』(文化15年)という句の発想から察しても、ほんものの馬とみるべきで、しかも武家のお馬と限る必要もあるまい。普通の駄馬と見ておいてもよかろう」。丸山『秀句選』に、「子供の遊びに、赤貝などの殻に緒を通し、うつ向けにしてはいて歩くと、ぱかぱかと馬の足音がする。この赤貝の馬や、竹馬などに乗って、『お馬が通る、先のけ、先のけ』と囃しながら走り回る風習は、地方にも多く残っているが、近世の黄表紙などにもその例が見える。『山のぬしはおれひとり、おんまが通る、さきのけっ、さきのけっ、はいはい』(『稚衆忠臣蔵』寛政十二刊)。一茶の句も、この語を利用したもので、貝殻の馬に乗って元気よく走り回っている子供が、よちよち歩きの雀の子に呼びかけたさまである。『雀の子よ、それそれお馬が通るぞ。踏まれないように、そこをどけ、そこをどけ』という意。童児嬉戯図に可憐な子雀を配したところは、そのまま童詩の世界である。楽しげな弾んだ口調も親しみやすく、少年少女に愛誦される句だ」。

てゐる人が、或は又傍観してゐる人が、親しげな剽軽な気持で、『雀の子そこのけ〳〵』といふ場合です。次に『御馬』を御殿様のお通りと見る場合ですが、しかし『御馬』は矢張り、雀の子に対してお馬といふ子供らしい言葉を使つたものと解した方が、ふさはしいやうです」。勝峯『評釈』に、「雀の子の黄色いくちばしは、往来のこぼれ餌を拾ふのに忙しい。はいどう、はいどう、公儀御用の馬を宰領してそこへ来かゝる。あぶないッ、さつさと飛んでのけろ。ふまれ、蹴られたらどうする。苦労性の一茶の顔には不安な影がさす。そんな時に『馬場退け〳〵、御馬が参る〳〵』の狂言言葉がそのまゝ口会ひのやうに、一茶の唇を綻びさせたのであらう」。伊藤『小林一茶集』に、「『そこのけそこのけお馬が通る』と言ふのは、昔子供が竹馬や玩具の馬に乗つて歩く時の掛声であつた。一茶は雀の子が馬にふまれぬ様にと注意を与へるのに、此常套文句を引用したのであらう」。川島『新解』に、「そこのけそこのけ権柄な調子を子雀に配したところに、おのずからなるユーモアがある。この句の解釈については、狂言言葉『馬場退け〳〵、お馬が参る〳〵』（対馬祭）に拠っているという説。あるいは当時の子供が竹馬や玩具の馬に乗って歩く時、先のけ先のけと、かけ声することに興味を持ったので、真物の馬ではないとも説かれているが、いかがであろうか。それは一説として、『涼まんと出れば下に〳〵哉　文化十四年』の如く、道で大名小名通行の警蹕（けいひつ）にあえば、庶民は土下座の止むなき時代であったのだから、このような調子が自然にまろび出たとしても不思議はないであろう」「長いあいだ雪に埋もれていた街道の黒い土、道ばたに群れている子雀、眠りからさめたように盛んになってくる車馬の往来。そこのけそこのけお馬が通る通るである。一茶の心が子雀と一諸におどっているようである」。荻原『新釈』に、「この句は田舎の平生はあまり人通りのない街道の感じがでている。人通りが少ないから、雀の子が往来に出てきて遊んでいるのだ。そこに馬がやってくる。それを『お馬』といったのも雀の子を人間の子供のように見て、子供のつかう言葉を使ったのがおもしろい。『のけ』というのは『退け』ということで、文語であるが、口語に近い文語である」「それから、この『お馬』はお武家などが乗っている、馬ではなくて駄賃で荷物をはこんでいる駄馬だということが解る。乗馬ならば蹄の音もカッカッと遠くからきこえようから、雀の子のほうで早くから遁げてしまう。駄馬がノッソリノッソリとやってくるから、傍に来るまで気がつかないのだ。それが米か麦を運んでいる馬であれば、俵から穀粒がこぼれがちなものだから、そうした駄馬がおりおり通るようなところでは、雀は危険をおかしても、馬のそばに寄ってくるものなのである」。中島『一茶集』に、「道端に遊んでいる雀の子よ。それそれ、そこにお馬がやって来る。馬にふまれないように、道をどけておやり。童謡風な発想や語調をそなえているので、少年少女に愛誦される句である。この馬は重い荷物をひいて、のろのろと田舎道を歩む駄

『評釈』、〔考〕の項に「上州から信州へ送る荷、それから逆に来る荷は、関所前の松井田で馬から卸し、或は新規に馬へ積むのが、江戸時代の常規であつた。松井田の宿屋の構造は馬ぐるみ曳いて入れるし、その馬と合宿する設備があつたさうである。松井田町の脇本陣で俳人の啄果、大河原玄次氏の談である」とある。

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る　（一茶）

⑭『八番日記』文政2・2。

注　狂言『対馬祭』に、「馬場退け〳〵お馬が参る」。黄表紙『稚衆忠臣蔵』に、「ぬしはおれひとり、おんまが通る、さきのけつ、〳〵、はい〳〵」。

解　雀の子よ、そこのけそこのけ、それ「御馬」が通るぞ、の意。この「馬」も支配者階級たる武家の馬。その「御」という文字に、その権力が象徴的に表現されている。それに対する「雀の子」、それは被支配者の位置や力を象徴するものと見てよかろう。狂言言葉であろうか、その「そこのけ〳〵」を使って、また、子供の「馬ごっこ」のかけ声らしく見せかけて、現実を告発・批判したのだった。

▼　川島『新釈』に、「畦道などに雀の子が三々五々下り立つて居る中を、馬曳いて行く人の親しげな気持。或は、傍観してゐる人の稍々はら〳〵した気持が感ぜられる」。勝峯『名句評釈』に、「雀がちよこ〳〵餌あさりに夢中になつて居る。そこへ馬が来る。あゝあぶない〳〵。早くよけろよ、この気持が自ら舌頭に迸り出たのがこの句だ。『お馬』であるからお殿様のお通りといふ風にも一寸思へるが、お殿様のお通り筋には雀などがちよこ〳〵しては居れず、一茶もうろ〳〵しては居れぬ。この『お馬』は、さういふのでなく、子供の気持ちになつての『お馬』でなければならぬ。又かうも解釈される。子供が竹か木の棒をまたいでお馬ごつこをしてゐる。それお殿様のお通りだぞ。『雀の子、そこのけ〳〵』と、馬上を気取る子供自身が呼びかけた様にした作意にも解される」。頴原『名作集』に、「まだ巣立つて間もない位の雀の子が、道の真中で恐れ気もなく餌を拾つて居る。そこへ馬が通りかかつたのだ。一茶はハッとした。『危ない〳〵。お馬が通るぞ。そこを退いた、〳〵』と、気をつけてやらずには居れなかつたのである。一茶が例の弱い動物に対する親愛の情が溢れるばかりに現はれて居る。一説にこれは子供が玩具の馬を走らせて居るさまだといふ。『そこのけ〳〵お馬が通る』といふのは、成程玩具の馬でも走らせる時の子供の口吻に近い。もしそれだと単に可愛らしい情景だけの句になるのだが、別に『それ馬が〳〵とやいふ親雀』の作もあり、やはり『そこのけ〳〵』は一茶が親雀になり代つたと見るべきである。かく解して始めて、句も一茶の作としての特色をおびて来る」。暉峻『鑑賞』に、「この句には二つの解釈が可能であります。その一つは、田舎道などに雀の子が下りて、夢中になつて餌をあさつてゐるところへ、馬がさしかかる。曳い

鶯の馳走ニ掃（はき）しかきね哉　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・2。同2・3にも。『文政句帳』文政7・5、中七以下「馳走に掃かぬ垣根哉」。

解　小ざっぱりと刈込まれ、あとかたずけもされているよ、この生垣は。近々やって来る鶯のもてなしにだろう。の意。

▼　勝峯『評釈』に、『垣根の辺を一ト撫でする。初春の訪問客鶯には、あるじまうけ（饗）の立派なもてなしはなし得ずとも、この通ひ路となる道掃除ぐらゐは、亭主の勤めだと云つた風の句意である」。川島『新解』に、「ちょうど待ちもうけていたように、小ざっぱりと掃かれたところへ鶯がやって来たのであろうが、この軽妙な洒落にも、鶯に対するほのぼのとした愛情が感じられる。黒々とした早春の土、低い生垣など鶯を主賓とするちまちまとした景色が眼前してくる」。

考　勝峯、川島とも「掃し」の主体を作者自身とするが、不精を売り物にした一茶だから他出の途次に得た題材と解したい。

馬迄もはたご泊（とまり）や春の雨　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・2。同2・3にも。同2・閏4「馬迄も萌黄の蚊屋（帳）に寝たりけり」。

解　春雨の中を宿を求めて難渋する旅人があるのに、武家の階級に属するがゆえに馬までが早々と宿をとっていることだ、の意。

『寛政三年紀行』蕨の宿での一件（「考」参照）を思い起こしての作とみる。

▼　勝峯『評釈』に、「はたごは旅中の宿屋である。雨の旅は難渋なので暮れぬ前から早泊りをする。そのついでに乗って来た馬まで、偖上に宿屋入りする偶見を詠んだのであらう」。「人馬の合宿は碓氷峠を下って、松井田の宿駅で、一茶の確かに経験した筈である」。川島『新解』に、「はたご泊りというのんびりとした語感と、春雨とによい調和があるが、この句の主眼は『馬までも』である。小はたごにうまやの設備があったろうとは思われぬので、これは高級旅館で、当時の優越階級たる士分の乗馬であろう」「うまやの軒には、あたたかい雨がしとしとと降りそそいでいて、手入れのとどいた毛並みの美しい馬が、食い足りて、とろとろまつ毛を伏せてもいるらしい、おっとりとした情趣である。加賀侯を泊めた柏原本陣の昔なども思いやられる」。

考　『寛政三年紀行』の旅、蕨の駅で一茶はさる大名の宿泊に出会い、宿をとることができなかった。「孤身抖擻の旅人、やどりかさぬハことわりなれど、大道をさへ追払ふ。よし草に伏、木を宿とせんハ初よりの思立なれば、おどろくべきにあらじと、痩たる跟を引いて、次の里へと志す」と一茶は記している。一連の現実的事実の告発・批判の句と考える。悲痛な現実を直視し、その真実を詠もうとする『八番日記』時代の一茶の眼には当然のごとく、時代の支配者たる武家の横暴もうつったのである。なお、勝峯の

『おらが春』所収句全注解（二）

黄色瑞華

凡例

一　本稿は、『おらが春』所収句（一茶二三二、他三二）の全注解である。

一　一行めに、『おらが春』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に（　）に入れて注した。

一　二行め以下に㊐として、初出及び他書に所収の有無を注した。句形等に『おらが春』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。

一　語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめ、特に必要な場合は「考」として別に記した。

一　各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。

一　注釈史上、主要な注は▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてフルネームで記し、以下は「川島『新釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

〈承前〉

今の世も鳥ハほけ経鳴（なき）ニけり　一茶

㊐『八番日記』文政2・2。前書「天音楽」。同2・3、上五「君が代は」。『希杖本一茶句集』にも。前書「天の音楽聞ゆるといふ事はやりければ三月十九日通夜せし暁に。」

注　「ほけ経」、鶯の鳴音に『法華経』を言いかける。

解　今のような末世にも、鶯だけは法華経を唱えているよ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「この句は其引（そのいん）の格で、文章（注、第三話）に対して与奪の権を握ってゐる。――霓裳羽衣の天人、むらさきの雲にはらばつて笙を吹くの図、それに謡曲の『虚空に花降り、音楽聞え』が下心にあつて、一茶も彼の周囲の人も、絵空事の天人を瞼のうちに実を観じて、天の音楽へのあこがれは、徹夜のかひなく『吹風の迹なし事』の失望に了つた」「天人の音楽より朗かに囀つた、鶯の告げる法華経の功徳へ今、末世の信仰は把握せねばならない。一茶の開悟はこの点にあつたらうかと思う」。川島『新解』に、『仏教衰退の現世でも鳥だけは法華経をさえずる、というだけの意であるが、本文（注、第三話）のしめくくりとして、天の音楽を待ちぼけた果てに、あけぼのの一声を聞かせたところは効果的である」。